

○2 番（石井亨君）

2 番、石井亨、一般質問させていただきます。

本日の質問は大きくは 2 点ですが、まず第 1 点目ですね、どちらの質問も観光の在り方ということで基本的な考え方の整理をこの質問の中でできればと思っています。

昨今の円高基調を背景にしてですね、全国的にはインバウンド需要の喚起ということで、それから、来年はちょうど瀬戸内国際芸術祭が開催される予定になっていますが、同時に同じ年に大阪万博が開催されると。この連動ということに関する話題が散見されます。これを背景にですね、現在土庄町では、グリーン・デスティネーションズアワードプログラムへの挑戦っていうのをやろうとしている。やろうとしているのでいいのかな。

小豆島町とともにですね、グローバル・サステナブル・ツーリズムカOUNセルのビジョンに沿って、どうカOUNセルの定めるクライテリアに基づいた評価、また審査を受け、グリーン・デスティネーションズアワードプログラムのブロンズ認証を受けることを目指しているということなんですよ。ちょっと、カタカナ言葉ばかりで、一体どれぐらいの一般の町民の方々がわかるのかなあというのは、非常に疑問に思います。こういうのはできるだけ資料の中ではですね、可能な限り日本語で表記をするようなかたちにしてほしいと思います。その上でですね、このグローバル・サステナブル・ツーリズムカOUNセルっていうのは一体何であって、そこが定めているビジョンというのはどういうものなのか、簡潔に説明をお願いしたいと思います。

○議長（濱野良一君）

商工観光課長 蓮池幹生君。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

GSTC とは、Global Sustainable Tourism Council（グローバル・サステナブル・ツーリズム・カOUNセル）、すなわち、世界持続可能な観光協議会のことで、持続可能な旅行と観光のためのグローバルスタンダードである「GSTC-Criteria（基準）」を定め、管理する国際非営利団体で、受け入れ地域の需要に適応しつつ、現在と未来の環境、社会文化、経済への影響に十分配慮した観光の推進をビジョンとしております。

この基準は、国連世界観光機関の指示のもと開発されており、観光産業向けの基準と観光部門全体の地域基準があります。

また、持続可能な観光の認証機関に対する国際的な認定も提供しており、今回挑戦するアワード制度は、この国際認証機関の 1 つであります「Green Destinations（グリーン・デスティネーションズ）」のアワードプログラムであ

ります。以上でございます。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

ありがとうございます。

そうですね、もう少し噛み砕いて言うと、ということになるのか、簡潔にホームページ上には「ビジョン」って表記されてるなというふうに思うんですが、観光は社会的・文化的・経済的利益をもたらす。これは可能性として十分あるんだと思います。その手段として、その潜在能力を発揮する一方、その活動から生じる環境や社会への悪影響があるため、その悪影響を排除回避していくことを目指すと。これは弊害のない観光をやっていけば持続可能性、これが見えてくるんじゃないかと。そういう意味で言うとですね、その地域社会、デスティネーション（目的地）ですから、そのマネジメントをどうするか、そのスキルに対する認証、取り組みに対する認証というふうに読めるわけですよ。

そこでお伺いしたいのは、ここでいう、いわゆる排除または回避すべき悪影響というのは一体どういうものを捉えているのか。その点に対するクライテリア、当然それはクライテリアの中に具体的にあるんだろうと思うんですが、参考までにいくつか例示していただければと思います。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

一つ例を挙げますとですね、いわゆるオーバーツーリズムっていうところの対策が挙げられると思います。現在もですね、エンジェルロードも含めてコロナ禍を経てですね、多くの観光客が訪れている。もちろんインバウンドも含めてです。そういったところの混雑解消であったり、あるいは観光客がよりスムーズに利便性、上手に利用できるような、そういった対策ということも必要なのかなというふうに思っておるところであります。以上です。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

今、オーバーツーリズムという、こういう言葉が出てきました。このデスティネーションズアワードの挑戦っていうこと以外にね、土庄町では現在、これは交付金申請という、そういう調整になるのか、オーバーツーリズム対策ということで臨んでいる。ここにはですね、課題として意図せずして生活圏域に観

光客が入り込むことを回避する必要性がこれが明記されているわけですが、今言った、このクライテリアの中にはこの概念って入ってくる話になるのかどうか、ちょっとそここのところを確認したいのですが。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

当然そのクライテリアの中にはそういった環境に対する配慮も入っておりますので、それは受け入れする側もちろん気をつけなきゃいけないし、訪れる側ですよ、そちらの方々もお互いに共存できるように協力し合って作っていきましょう、というのが持続可能な観光という目指すべきところでありますので、そういった受け入れる側も来る側も、双方が一緒になって作っていきましょうねという理念のもとに動いていこうというものであります。以上です。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

そしてですね、この挑戦の資料の中に、これにトライすることで得られる効果というかアウトカム、指標を完成する過程で地域の現状を把握できるっていう、こういう表現出てますね。いろんな観光政策をこれまでやってきたんですが、これはアワードに挑戦するということをもって、具体的に言えばその弊害部分もあぶり出し、あるいは可能性部分もあぶり出し、そのマネジメントに対して必要なものは、これからいろいろ検討していこう研究していこうということになるということだと理解してよろしいですか。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員おっしゃるとおりでございます。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

この調整についてはわかりました。

そしたらですね 2 つ目、大きく 2 つ目の質問に移りたいと思うんですが、来年、第 6 回目となる瀬戸内国際芸術祭 2025 が予定されています。

瀬戸内国際芸術祭って、対外的には一つのお祭りという、そういうかたちで見えるんですが、現実にはですね、実行委員会直営のもの、それから福武財団直営のもの、それから民間私企業の芸術祭公認作品、あるいは外からは芸術祭

には見えるかもしれないけれども芸術祭とは関係ない便乗の開発行為も一体として外から見たら芸術祭に見えるっていう、こういう感じになってるんだろうと思うんですが、そうですね、アートで地域振興という言葉がよく聞かれます。アートという概念の議論、アートそのものの持つ可能性とか暴力性とかいろんな指摘があります。課題がいっぱいあると思うんですが、あるいは福武財団という公益財団法人がどうあるのかと。これと瀬戸内国際芸術祭っていうのは、似てるようでそれぞれ立ち位置も目的も多少違いますので、ここは瀬戸内国際芸術祭、この部分についてのみ質問をしていきたいと思いますけれども、実際ですね、会場となる地域、豊島もそうです小豆島もそうですが、ここに住んでるものからするとですね、会期の直前に、「来期の作品が決定されて説明します。決定事項です」という、こういうかたちで知らされるという印象が非常に強いんですね。どういうふうに物事が決められていくのかも含めてですが、今年度、準備期間ということですけど、一体どういう手順でこれから進められていってその目的は一体、そもそもこの芸術祭の目的は何なのかっていうことを改めて、ここで確認をしたいと思います。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

まず、目的についてお答えいたします。

瀬戸内国際芸術祭は、開幕当初から、「海の復権」をテーマとして、アートを媒体とした交流とつながりを生み出すことによりまして、瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海がすべての地域の希望の海となり、島の将来の展望、希望につなげることを目的としております。これはもう当初から変わっておりません。

それから、企画準備の段階の関わり方ということでよろしいでしょうか。につきましてですね、瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局のほうからは、現在作品および作家の選定が行われるというふうに伺っております。作品および作家の選定につきましては、主としまして、北川ディレクターにより行われるものというふうに認識しておるところであります。これに基づきまして、その後、地元の説明会であったり候補地の選定、土地建物の賃貸借協議などが行われるのが通常でありますので、町としましては、地元とのパイプ役として日程調整をはじめ、各種の会合であったり、打ち合わせに同席するなどして地元との調整に努めてまいりたいと思っております。

また、作品の候補地として想定される地域につきましては、事前に地域への説明を早め早めに行うように実行委員会のほうにはお願いしているところであ

ります。以上であります。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

すみません、ありがとうございます。

次の質問の部分まで含めて答えていただきましたが、いずれにしても、この事業自体は瀬戸内国際芸術祭実行委員会が主催する。で、その上で、今作品の選定とか、そういうお話がありましたけれども、細かい調整なんかは要請を受けて町のほうで行う部分があるということですよね。で、もう少し具体的に言えばですね、実行委員会が編成されて、この実行委員会自体が作家や作品の選定を行い、民間企業の作品を公認するとかこういう企画というのか、その部分は実行委員会として株式会社アートフロントギャラリーに全面的に委託しているという、こういう状態ですね。その上でですね、この実行委員会のメンバーを見せていただくと、どうなんでしょうね、僕は全員に面識があるわけではないので分かりませんが、そのアートの在り方云々ということについて議論するような立場の方は何か見当たらないなという気がしてですね。そうすると、基本的に住民の場合、「決定事項です」って説明があって、っていきなり始まるような印象がある。実は、実行委員会でも何かそのような、こう説明されると、それがこういうかたちなんですよということで、そこで喧々囂々議論されて修正加えられたりとか、あんまりそういうことは起こらないんじゃないかっていう想像をしてしまいます。

土庄町がですね、町内の作品とかそういうものに対して、意見を言ったり検証したりとか議論していくっていうのは、これ実態としてその余地はあるんでしょうか。そのことについてお伺いしたいと思います。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

ご質問にお答えいたします。

当然のことながら土庄町のほうには、小豆島が本土のほうと豊島というのがありまして、どちらも人気の島となっております、瀬戸芸にとってはですね。というところもありまして、作品はもちろん選定するのはディレクターなり実行委員会なんですけど、それを持ってくるときにですね、当然われわれのほうにも説明といいますか、報告がありますので、それを持ってですね、一緒になって地域のほうに説明に行くというふうになりますので、もしその際にですね、地域の方のほうからご意見がいろいろあると思いますけれども、賛同される意見もあるでしょうし、ちょっとこれどうなのということもありますので、その

あたりは、われわれが吸い上げてですね、しっかりと実行委員会のほうには、要望してまいりたいというふうなスタンスであります。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

ありがとうございます。

そうなんですね、町として、意見を言ったりとか議論する余地があるんだったら、それって本来なら議会にも説明され図られるものかっていう印象があつてですね、そういう議論の流れではなく、個別の作品について地域に説明に入って地域と話し合いをするというかたちということなんですね。

そうすると逆に言えば、この流れの中で町内で実施すること、全体でいえば大きいですが、町内でもいろいろなことをやるわけですけど、それに対して町議会が関わるという機会は基本的にないという話になるんですかね。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

町議会の関わり方ということになりますとですね、これまで瀬戸芸 5 回やってきましたけれども、そのときと同様にですね、実行委員会での事業進捗に併せまして、作品展開の予定であつたり、あるいは準備の状況などですね、そのときはもう随時、常任委員会等でわれわれもできる限りのものをご報告させていただいてきたと思っております。今後もそれは変わりません。しっかりと議会のほうには説明を申し上げていこうというふうに思っております。ですの
で、仮にも議会のほうから瀬戸芸に関する要望とかご質問がありましたらですね、その場合には実行委員会事務局に、われわれのほうから、こういった意見があるということをお伝えしたいと思っております。

ただ、それぞれの議員さんになりますとですね、なかなか受ける側もちょっと難しいのかなと思っておりますので、できるのであれば、土庄町議会としてのある程度の総意のもとで、こういった意見があるんだけど、ということをお持ちいただければ、それを実行委員会のほうにはお伝えしていきたいというふうに思っております。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

微妙なところですねと思いながら、議会の総意というかたちなら要望を伝えていくけれども、そうでなければ伝わらないともちょっと聞けるような印象が少しありました。

ここは、まちですから、町ですから、住民の暮らしに直接まつわる物事ってのは、その大半が町が直接運営に当たるっていうのが一般的ですよ。基礎自治体と呼びますが、基本的には二元代表制で運営している、そういう状態になっている。で、もう文字どおりですけども、直接選挙で選ばれた町長さんが提案を出されて、執行部ですね、また直接選挙で選ばれたわれわれが、それに対して質問したり議論をしていって政策ってのは決められていく。そういう流れをたどります。

これが、例えば消防だとかですね、老人ホームだとか、家庭ごみの中間処理とかですね、焼却をやっている広域事務組合になると、今度は同じようにやっぱり二元代表制と踏襲をしていますけれども、その代表者とか、あるいはその議会議員というのは直接選挙で選ばれるわけではない。さらに間接になるので、一般的によくこういう一部事務組合なんかの行政形態というのは、住民不在の行政と呼ばれたりする。なかなか声が届きにくかったり、チェック機能が機能しにくかったりという距離感になるという話なんですけれども、今の流れの中で考えていくとですが、その瀬戸内国際芸術祭がこれ進められるに当たって、こういったチェック機能みたいなものはどこで果たされるようになる仕組みになっているのか、ご説明をいただきたいと思います。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

チェック機能というところなんですけど、ちょっとずれるかもわかりませんが、もちろん地域の住民の方っていうのは、この瀬戸芸にとってもものすごく大事であって、一緒にしていかなきゃいけないということなので、先ほど申し言われましたように、「ちょっと急に來てるんじゃないの」とかですね、そういったところというのは、われわれ「県、ちょっとおかしいんじゃないの」とかいうところは言っていってつもりであります。なので、早め早めにそういった説明会であったり、あるいは地元の調整、あるいは情報の協議を経て、できる限り皆さんが納得できるような方向に持っていってくださいねというところは、実行委員会のほうにも申し上げておりますし、それも一緒になってやっていきたいところですので、そういったおかしい面がありましたらですね、ちょっと意見をいただいて、それを一緒になって解決していきたいというふうな今スタンスであります。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2番（石井亨君）

ありがとうございます。

なかなか具体的なシステムみたいなことになってないというか、そういうことかなというふうに思うんですが、そういう意味では、この点も例えばアワードの認定の中ではですね、どういう仕組みでどういうふうに再検証されていきますか、みたいなことっていうのは、問われることになるのだらうなと思います。

それと同様にですね、今地元の説明という、こういう話があったんですが、実際ですね、瀬戸芸ですが、瀬戸芸 2019、例えばですが、これ主催者発表によると、豊島入込客数って 105 日間で 14 万人という、こういう数字をいただいています、単純に割ったら平均 1 日 1300 人という、こういう数字になっちゃう。これって豊島の現在人口のおよそ 2 倍の人たちです。この数の人たちが島へやってくる。実際にはですね、土日に結構集中しますし、集落ごとに随分と偏差があるので、部分的にはやはり、かなりオーバーツーリズム傾向だなあと。積み残しとかそういう問題もあればですね、いろんな課題がいっぱい出てきているんだらうと思うんです。

実はですね、現在私が住んでいる集落って、現在 60 人ほどの集落なんですよ。実は、ありがたいことに移住先としてはとっても人気が高い場所です、現在 60 人余の住基台帳人口の中で、成人だけで 18 人がですね、この 10 年ほどの間で移住してきてくださった方なんですね。子どもは 1 人しかいませんでしたけれども、現在 9 名というこういう状態で、子どもの声がですね、日々聞こえるという、こういう状態になってて、これ本当にありがたいことだと思います。0 歳児が、規模が規模ですから 0 歳児が 1 人産まれると平均年齢は 1 歳以上下がるという、こういうところなんですね。で、その子どもたちが地域の奉仕作業や地域の行事なんかにもいろいろ参加してくれていてですね、集落が子育ての現場であり、地域で子どもを育てるっていうそういう状況というのが、また、昔のように取り戻されてきているっていう、そういう状態あります。割と早い段階からですね、例えば棚田の稲作、現在島では高齢者ばかりですけども、いずれ現役を引退することになると。その後も稲作が続くようにということで、今のうちに技術を伝承しようとか、そういうかたちでそういう方々の稲作を手伝って覚えようとしてる人たちもたくさん見かけます。

もっと移住してくる人を増やしたいと、それからそういうことで片付けなどのボランティアを名乗り出たりとかですね、あるいは空き家の実態調査を自分たちでやったりみたいなこともやっていたり。それから、電力の需給みたいなことも検討してみてもいいんじゃないかという勉強会もあったりもしました。

実は私自身もですね、この集落は 2017 年から暮らしてしまして、この人たちと一緒に地域向けの映画会をやったりとか、大学を招いて一緒にワー

クショッブをやったりもしてきたわけですが、ここに住み着いた人たちが何でここに住み着いたかなということを考えたときにですね、皆さんの意見も聞いてもそうなんですけど、ここには静かなのどかな暮らしがあると。自然と接したのどかな暮らしがあると。この辺が最大の魅力なんだろうと思います。これは移住してきた人たちだけかという、そうでもなくって、土庄町が実施した平成4年5年の豊島のプランとビジョン、あるいはその後2019年に私も調査していますが、その意識調査を見てもですね、「島の人たちが一番島で好きなことは何なんですか」というと、のんびりとした静かな暮らしであると。だからここは1つの大きな資源ではあるんだろうと思います。どういえばいいんでしょうね、小豆島でイメージすると、北浦のような性格の地域というイメージなのかもしれませんね。

地域おこし協力隊の報告を聞いてもですね、割と何も無いところが案外人気スポットでっていうことで、移住が進むという、こういう話を聞いたこともあります。で、瀬戸芸がですね、きっかけでこの島を知ったという人は、実はこの中にはそれなりにいらっしゃって、これがいわゆる瀬戸芸の一つの効果であるという、こういう話が出てくるともあります。ただ、あまりこう報道されたりすることはないですけど、その一方で、この状況が嫌だということで、島を離れるという相談を受けたこともあるし、実際に見送らざるをえないという体験もしました。そういう中でですね、次の瀬戸内国際芸術祭というのが、企画されているわけですけど、実はですね、大きな提案が島外から外部から入ってくると、どうしても傾向としては地域の中で賛成反対みたいな議論になってしまって、二分して同じ地域の人たちがいがみ合うっていうことがよく起きます。これ自体は現象として当たり前にかかるんだと思うんですが、現に豊島はいろんなところで分断されている状況があるというのは、これは執行部の方々も議員諸氏もよくご存じのことだと思います。

うちの自治会というのは、3自治会のうちですね、比較的混乱の少ない自治会だなというふうには思っていたんですが、実は昨年の12月に実行委員会ではなく、株式会社アミューズのほうから海岸に196体の子どもの像を常設し、それは1年間の瀬戸芸作品じゃなくって、それこそ常設作品でずっと恒久的に残したいという提案がありまして、ここから実際、かなりギクシャクし始めたかなというふうに思っていますが、その後5カ月余りですね、何の説明もなかったんですね。実は、アミューズさんという会社、島内ではそれなりに相当広大な土地をすでに次々と買収をされていて、研修施設なんかも建設されています。集落の中でもいろんな土地を買われているという、こういう状態があるんですが、この作品を展示したいという場所の事実上の隣接地ですね、このところにも、旧漁協の建物をすでに買い取ってありますが、こういうところでど

ういうふうなことをしたいのかということについては、現状を、今のところ説明が受けられていません。そういう状況の中でですね、いろいろ非常にうわさとかそういうのが先行して、だんだんぎくしゃくし始めてるという現状が事実上あります。

実はですね、甲生という地域でも、もちろんこれまでも会場ですとあって、作品展示いろいろやってきている。ただ、現実の感覚としたら比較的鳴かず飛ばずだったので、容認の範囲じゃないのかっていう感覚があるんだろうと思いますけれども、そのような状態の中、つまりこの議論が出る以前にですね、実は引っ越しをしたいという話が出てきてまして、出てきていまして相談を聞いていますけれども、つまりそんなに現状まだ多くはないんだけど、それなりの数の観光客の方が来られて、家の中をのぞかれる、ちっちゃなお子さんいらっしゃる家庭ですので、どこの窓もすべて外向きに開放されてるような状態なので、やはり非常に、非常にしんどい、引っ越し先を探している、というこういうような状態があります。

それからですね先日もですね、青少年健全育成の会で、基本豊島は自転車事故が多いんですね。「自動車の方は気をつけてくださいよ。どんなに自転車側が悪くても、完全に止まってない限りは、接触すると自動車が悪いということになり、賠償責任を問われますよ」ということを警察から説明ありましたが、その中でですね、先日こういう報告ありまして、観光客が下校中の小学生に声をかけて、名前や家の住所を聞かれ、いろいろ話を聞かれたっていう状態があって、下校時間なのに子どもがなかなか帰ってこないって言って、おばあちゃんが迎えに向かったら観光客に話を聞かれていて、連れて帰ったものの、どう子どもたちに説明を、説明というか、教えればいいのかなど。それは何かということ、知らない人に声かけられたら逃げなさいっていうことを教えるんでしょうか。随分、葛藤されているようでしたけれども、私は何が言いたいかというとですね、いろんな考え方がある、当然そのことだと思います。そこに移り住んだ人たちは、静かでのどかな暮らしを温存したいと思ってる。それが成り立つ話かどうかはまた別なんですけどね。そういうことは考えている。今、直ちに全面的に反対だとか、そういう話ではなくて、少なくとも説明会が開かれて議論に参加して、その上で結論が導かれていくということであってほしいと。一方でですね、過去の経験から、いやいやずっと鳴かず飛ばずできて、そんなことにはならんよと、受け入れてもいいんじゃないかと、ここが2つ大きく意見分かれてるわけです。

その一方でですよ、アミューズが何をしたいのかってのは、今後説明していただけるはずだと思うんですけど、現状何年も経ってますが、まだ説明を受けられてません。単純にですね、ここは営利企業ですから、当然そこを投資すれ

ば回収するということで、できるだけ多くの観光客に来てほしいという、こういうことになるんだろうなと。これは別に悪いという話ではなくて、本来そういう性質なんですよっていう話。で、実は4月に福武さんにばったり会ったんですよ、福武宗一郎さんです。港でばったり会いましたら、「アミューズがいろいろやりたいようだ」と、「この漁港はですね、利便性悪いから浮棧橋つけてチャーター船がじゃんじゃん乗り込めるようにしよう」と、「接岸できるようにしよう」と、「あんたも浮棧橋探してな。町長にも言うとかけん」って言って、彼は行ったわけです。それはそれで、彼なりのイメージ、ビジョンがあるんだと思います。で、僕は一番大きな問題じゃないかと思ってるのはですね、これらが1つの地域で、全部が満足できるはずはないと僕は思っていました、それはもう少し具体的に言えば、生活圏域に観光客が入ってくるのは生活者にとっては弊害ですよという認識はあるけど、その一方でですね、生活圏域の中に作品を作ってそこに観光客を誘導しようというそのアプローチがある。観光客を増やすという方向で考える必要があるんでしょうけれども、だとしたら、きちんとゾーニング、棲み分けを考えないと、やっぱり、そもそも基本的な考え方に無理が出てきてるんじゃないかというふうに思います。そのゾーニングの必要性ということについては、実行委員会が考えることと言われるかもしれませんが、町としてはどう考えているのか、その点をお伺いしたいと思います。

○議長（濱野良一君）

蓮池課長。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

ゾーニングの話になりますが、ちょっと元に戻りますとですね、いわゆるその地域との関わりというのは、もう必ず大切でありまして、その瀬戸芸の目的ですよね、コンセプト等照らし合わせますとですね、やはり地域住民の皆さんのご理解であったり、あるいはご協力というのが不可欠であるというふうに思っておるところであります。

瀬戸内国際芸術祭には、観光の振興、地域との共存とそういうことが、両側面があると思うんですけども、いずれにしてもですね、地元の地域住民の皆さんのご理解のもとでですね、われわれ官民が一緒になって進めていくことが望ましいというふうに思っているところです。

一方ですね、甲生地区もそうなんです、前回ですと、塩田千春さんなんかのビッグネームもありました、というところでたくさんの方がおいでですけども、実際来訪者の多くはですね、地域住民との触れ合いというのを求める傾向にありまして、こうした来訪者をもてなして積極的に関わっていこうとす

ることもこの地域の関係者としては必要なんじゃないかなというふうに思っております。というところを踏まえてですね、いずれにしてもゾーニングの話っていうのは、瀬戸芸にとっては実行委員会があり、大枠のゾーニングというのは、実行委員がおそくなされると思っております。その中でですね、勝手に作っていくじゃなくてですね、やっぱり地域の住民の皆さんと協議しながら一緒になってゾーニングを作っていく。「ここは生活圏だよ」とか、「ここはアート圏だよ」とかいうところをですね、踏まえてアートと生活圏というのが融合するような、もしくは共存できるような、そういったゾーニングというのを実行委員会だけでなく、町だけでなくですね、地域の皆さんと一緒に作っていくということが大事なんじゃないかなというふうに今、思っているところです。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

そうですね、アワードのほうでもですね、やっぱり地域住民、地域コミュニティとともに計画策定、あるいは管理、それをやってますかが問われることになる、チェックが入る、こういうことになるんだと思うんですが、今さっきの2つは、コンセプトが真逆なので、ここでは答弁しにくいというのがあるんだらうかもしれませんが、そして瀬戸芸自体はどちらかというと東京で物事が決められる。私たちが住んでる地域社会の話ですけどね。そして、とくに民間の場合であれば、その民間が自分の所有地とか所有物で何かをするということについて、なかなかそれを関与、関与するというか、「こういうのはやめてください」とか、「これだったらいいですよ」という、その話はできるけれども決定権には関与できない。これ当然あるんでしょうけど。でも、そういう意味ではですね、少なくともこの流れの中で、町の管轄地、町有地を提供するということについては、これはやはり地元合意というのは大前提だと考えていいんですよね。

○議長（濱野良一君）

岡野町長。

○町長（岡野能之君）

石井議員のご質問にお答えいたします。

先ほどのゾーニングという部分なんですけれども、ゾーニングにつきましては、生活圏と芸術祭の作品設置場所が重なってる部分がございます。それは逆にですね、地元のほうから「設置してください」というような要望もございます。

ただ、石井議員ご存じのとおり、われわれの要望がすんなりと通るようなイ

ベントではございません。そのようなところで、われわれは地域のほうから声があった場合は伝えますが、それがうまくいかない場合もあります。それと、甲生地区におきましては、先日、芸術祭実行委員会の方と話しまして、地元での調整がつかないのであれば、町有地の貸し出しを行わないというふうに言っております。そのためにですね、丁寧な説明を町民、住民の方と一緒にですね、今後進めてくださいというふうにお伝えしておりますので、その辺ご理解いただきたいと思います。

○議長（濱野良一君）

石井亨君。

○2 番（石井亨君）

町長ありがとうございます。

町有地の貸し出しということについては、地元の理解が前提である、合意が前提であると。ただし、その説明責任は実行委員会側ですから実行委員会のほうできちんと説明し、ちゃんと理解を得てくださいという、こういう趣旨と理解しました。

もう1つ、やっぱり大変な課題があつてですね、というのは、どんどんどんどんいろんな議論が先行するものですから、他の自治会から、自治会といっても、自治会という組織、公式じゃないです、そうじゃなくて、他の地区に住んでる人たちからですね、「甲生だけで議論するな。決めるな」みたいなかたちの要請であるとか、苦情とか抗議とか、いろんな連絡がどんどん入ってきています。そういう意味で、ここは町ですから実行委員会のほうにですね、できるだけ早く公開して、きちんと意見を求めるようにということを伝えていただきたいというふうに思います。

それと、もういよいよ最後になりますが、こうやって観光振興をずっとやってるんですけどもですね、私びっくりしたのは、豊島の唐櫃港なんです。唐櫃港がですね、船着き場の待合所にクーラーがないんですね。建設して20年という状態になっている。繰り返し地元から、その要望が出ていますけれども、いまだにクーラーが入っていないくて、真夏クーラーなしでやり過ごしていると、こういう状態があつて、観光ももちろんありますけれども、もともと生活者がいるわけですね。観光を進めるということであればなおさらですけども、ぜひとも、この時代ですからクーラーを何とか検討していただきたい。このことを要望しまして、私の質問を終わりたいと思います。ありがとうございます。